

まち

# まち むら

126

グラビア 竹炭を川の浄化に役立てる

—兵庫県加古川市 リバークリーン・エコ炭銀行—ほか

ルポ 次世代を想い、次世代へ贈る、集団移転の挑戦

—宮城県気仙沼市 小泉地区の明日を考える会—ほか

論文 都市の共同居住／実践的自治会町内会論





# 竹炭を川の浄化に役立てる

兵庫県加古川市 リバークリーン・エコ炭銀行





「リバークリーン・エコ炭銀行（以下、エコ炭銀行）」（代表・播本達さん）は、加古川上流域で繁茂する竹材や間伐材を利用し、それを炭にして川の中に埋設することで、加古川流域の水質浄化を行っている。メンバーは100名。竹を提供してくれる人に対しても、炭にして還元するシステムをつくり、それを運用するところから銀行と名付けた。竹の提供者、炭づくり参加者、銀行の三者が炭を分け合い、必要な地域に融通していく。それが気軽に参加できる仕組みにした。炭には、水をきれいにする効果があるといわれている。特に竹炭は竹の小さな穴に不純物を入れて浄化する。河川の水質浄化について、最下流のまちからメッセージを発信することによって、129ある加古川流域の支川全体に活動の輪が広がることを期待している」という。

兵庫県では、毎年、中学2年生を対象に「トライやるウイーク」を実施。職場体験などを通して地域について学び、「生きる力」を育むことを目的に、1998年から行っているものだが、エコ炭銀行では、取材をした週は毎日、浜の宮中学校と加古川中学校の生徒さんがあわせて68名を受け入れていた。この日の午前中は、加古川の河口に近い松風公園で、花壇を整備し、県の花である野路菊を植える。土をふるい、土に混ざった植物の種などを火で焼き、碎いた竹炭をまぜて、土を整える。この竹炭は、川に埋設した炭を再利用したもので、土に撒くと土壤改良剤になり、水持ちが良く、根張りに効果がある。

また当日は、加古川クリーン作戦も行われ、若宮小学校の児童が加古川の土手に集まっていた。浜の宮中学校の皆さんもゴミ袋をもって、河川敷のゴミ集めに参加。川風が涼しい。中学生たちがエコ炭銀行のメンバーの方と語らいながら、並んで歩く姿はほほえましい。

エコ炭銀行の活動の拠点は、加古川下流浄化センターの近く、松風公園にある県民エコ広場（兵庫県東播磨県民局と協働）だ。県民エコ広場では、竹炭になる過程を見ることができる。伐採した竹が集められ、竹を割り、長さをそろえ、節をとり、「炭化装置エコタン191」に入れられ、約5時間かけて焼き上げ、竹炭になる。「トライやるウイーク」の中学生たちは、連日、この作業を手伝う。山奥で炭を焼くのではなく、まちの中でも作業でるのは、この炭化装置があるからだ。地元、加古川の企業、巴製罐株によつて製造された。エネルギーをほとんど使うことなく、炭を作るという優れたものだ。

午後からは、川に埋設した炭を取り換えるため、穴田公園に赴く。ここには、養田川から分岐した水路があり、エコ炭銀行と国立明石工業専門学校が、ホタルの生育環境実験と竹炭の水質浄化性能実験を行っている。埋設した炭の交換は、1年に一度実施される。袋に入った炭は汚れを吸い、臭いも放つていたが、たくさんのカワニナが見られた。カワニナは、ホタルの幼虫のえさになる細長い巻貝で、水がきれいなところに集まるといわれている。

今から10数年前、加古川市尾上町養田という約



400世帯のまちの区画整理事業にともない、まちの中心を流れる養田川は、付け替えられる予定になっていた。ところが、「トライやるウイーク」の一環で、地元の中学生が川の調査をしたところ、たくさんのが生き物が生息していることが判明し、それをきっかけに、環境に配慮した川づくりを考えるようになる。やがて、この取り組みが行政を動かし、コンクリート張りの新河川については、川底を自然のままに残した工法に変更され、旧河川も、その一部が公園やせせらぎとして再生・整備されることになった。エコ炭銀行は、2003年3月に、この養田川を拠点にして、炭を使って河川浄化に取り組む町内会の有志のグループとして出発した。

また、東日本大震災の被災地支援として宮城県南三陸町に赴き、住宅数戸に炭を敷設、さらに、企業の協力も得て、炭づくりの機器を提供し、炭づくりの講習会なども行つた。

エコ炭銀行のつくる「健康竹炭」は、お風呂に、炊飯に、飲料水に、部屋や車に、安眠枕にとその用途は広い。遠赤外線、ミネラルを多量に含み、殺菌、消臭、吸湿、防虫効果など、衣食住さまざまな分野で不思議なパワーを發揮するという。メンバーの皆さんのパワーを思えば、その効能ははかりしれない。是非お試しください。

■連絡先 〒675・0025

兵庫県加古川市尾上町養田1245

リバークリーン・エコ炭銀行 代表 播本達